

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第21回 なか やま ぎ しゅう 中山 義 秀

早稲田大学で小説を発表

中山義秀は、明治33(1900)年10月5日、福島県岩瀬郡大屋村(現在の福島県白河市)に父竹蔵、母スイの三男として生まれ、本名を議秀よしひでといった。両親は水車業で生活していたが、水利権の問題で村人たちとの間に紛争があり、村を離れ転々としていた。やがて二本松町(現在の二本松市)に移り住み、父が薪炭しんたんや山林の売買を始めたことで、再び生計が立つようになった。

大正2(1913)年、郡山市の安積あさか中学校(現在の安積高校)に入学。実家から遠かったため寄宿舎に入ったが、両親が恋しくなり毎週土曜日には実家へ帰っていた。そんな義秀のために、両親は同3年に二本松町から郡山市へ引っ越した。

読書好きの少年であった義秀は、大正7年に中学を卒業すると、早稲田大学高等予科第3部(文科)に入学し、同9年には文学部英文科に進学した。大学では、富とみノ沢麟太郎、横光利一らと出会い、同人雑誌『塔』を創刊し、そこで小説『穴』を発表した。この頃は、時代の流れともいえる社会問題、労働問題に関心を持ち、社会学やカール・マルクスの研究も行っていった。

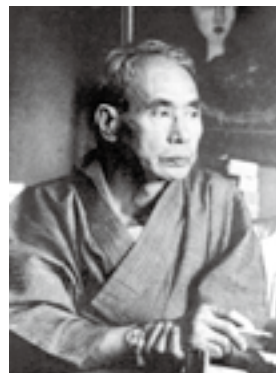
大正12年に早稲田大学を卒業したが、縁故がなかったため東京で職が得られず、三重県立津中学校(現在の津高校)に英語教師として赴任した。しかし、校長との間にトラブルを起こし、同14年に辞職した。



左/成田中学校での中山義秀(中列右から2人目。『図説 成田の歴史』より)
右/中山義秀文学碑(場所:成田山公園)

明治33年～昭和44年(1900～1969)

福島県岩瀬郡大屋村(現在の福島県白河市)に生まれる。本名は議秀。早稲田大学在学中に、同人雑誌を創刊。卒業後、三重県立津中学校(現在の津高校)、成田中学校(現在の成田高校)の英語教師になり、その傍ら、創作に励んだ。『厚物咲』で第7回芥川賞を受賞するなど数々の名作を残した。



大正15年4月、義秀は親友の紹介で、成田中学校(現在の成田高校)に英語教師として赴任。住居を転々とする中で、最終的には中学校を遠望できる印旛郡遠山村東和田(現在の東和田)に移り住んだ。教師の傍ら、執筆活動を行うなど、生活はのどかで平和そのものであった。

しかし、昭和4(1929)年、成田中学校では校長排斥運動が起き、関係していた4人の同僚が解雇を言い渡された。義秀はこの事件には無関係であったが、いつからか首謀者とされまい、同8年3月、校長の勧告で成田中学校を退職。泣く泣く成田を去ることとなった。

芥川賞を受賞

その後も執筆活動を続けた義秀は、昭和11年、最初の小説集『電光』を発表。この頃に川端康成らと知り合った。また、福沢諭吉の『福翁自伝』に強い感銘を受け、文学一筋に創作活動を続けた。そして同13年、短編小説『厚物咲あつものざき』で待望の芥川賞を受賞した。以後、幕末の天狗党に加わった祖父をモデルとした『碑いしづみ』、明智光秀の叛逆の生涯を描いた『咲庵しょうあん』などを発表し、文学者としての不動の地位を築いた。

昭和44年8月19日、68歳でその生涯を閉じた。成田山公園には、かつての教え子たちの手による中山義秀文学碑が建てられている。

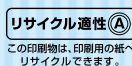
編集後記

新元号の発表まで残りわずかとなりました。どんな名称になるのか皆さんも気になっているのではないのでしょうか。元号を決めるにあたっては、漢字2文字であることや書きやすいこと、国民の理想としてふさわしいような良い意味を持つものなど6つの条件があるそうです。平成に生まれた私としては、平成が過去のものになってしまうのかと思うと少し寂しくもなりますが、さまざまな意味や願いが込められた元号の発表が楽しみです。

平成31年3月15日号 No.1383

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。